

いったものではなく、あくまで生命的・有機的統一性なのである。「生きもの」である以上、『告白』には、どこかに向かうという行程や成長発展が、そして全体としての有機的調和や生き生きとした活動があることになろう。そのような生きものには「生きる目的や夢、理想や願い (286頁)」があるだろうし、そうであるならば、その生きものは深い他者認識の相手としての「あなた」になり、また「親友の山」となるであろう。このような見方は、まさに「読む人 (lector)」と「書かれたもの」の間の人称存在論的な「関係」の問題であり、この点で、本書は、『告白』論としても、テキスト論としても新鮮な見地を有していると思われる。

人称存在論的立場から『告白』を読み解く本書は、それ自体極めて生き生きとした探求の書である。このような、正面から人間の根源的事実そのものに立ち向かい着実且つ全体的に思索してゆく姿勢は、その根源性へのアプローチの故に『告白』研究に新しい道を開くと評者には思われる。実際、そこから、『告白』というテキストが書かれた事実に対する積極的な理解が現れてくるのである。つまり、本書によれば、『告白』の主人公アウグスティヌス自身の体験した言葉は、肯定的なものであれ否定的なものであれ、彼自身に解釈経験をもたらし、その都度心の中の島に他者認識の配置図を作らせていった。そのような、現実を経験する者の立場とは別に、自己を反省的に書き記す立場にもいるアウグスティヌスは、今度は他者への伝達（「人類に語る (347-8頁)」）のために、そして「深い淵からあなたに叫ばねばならない (347頁)」ことを理解するために、『告白』を、あなたへの「呼びかけの書・〈ad te〉の書・淵と淵を繋ぐ書」として書き表したのである。

岡野昌雄著

『アウグスティヌス『告白』の哲学』

創文社、1997年、xvi+230頁

菊 地 伸 二

本書はアウグスティヌス研究に長いこと取りくんでこられた著者が京都大学に提出した学位論文に修正を加えたものであり、『告白』全体を貫いている主題を作品その

ものうちに深く入りこみ、作品世界の文脈の中で作品そのものに聞きながら（著者はそれをある意味で保守的であると述べておられるが）探求した著作である。『告白』はともするとその自伝的な要素だけが強調され、あの劇的な回心の出来事が終極のように見なされて、その結果第11巻以降の創世記解釈はいわば付け足しとして切り離されてしまうきらいがあるが、そうした傾向に対して『告白』はその第1巻から第13巻に至るまで、思想的に如何に一貫した主題が流れているかをアウグスティヌス自身の言葉に耳を傾け、その言葉の中から裏付けていくのがこの書の何よりの特徴としてあげられよう。本文は『告白』の叙述の順序に従って六つの章に分れているが、それらは違った局面からこの一貫して流れている主題を明らかにすることに力が置かれており、各々の章は相互に密接に関連して全体としての一連性を保っている。従って我々は、各章で帰結される結論からはもちろんのこと、それを導きだすプロセスの中で『告白』の主題に触れた叙述にしばしば出会い多くの示唆を与えられるのである。ただここでは便宜上、各章の叙述に従って、私見を交えながらその内容を紹介することにした。

*

第1章 『告白』の主題と形式

本章はまず『告白』の執筆の時期の検討からはじまるが、大切なのは具体的にいつ執筆されたかというクロノスの時ではなく、それがアウグスティヌスの生涯においてどのような状況の時に書かれたかというカイロスの時であり、その執筆の背景にマニ教批判が深く関連していたと述べる。彼にとってマニ教批判は単なる理論的批判ではなく、自らもかつてそこに属していた以上、必然的に自己批判とならざるを得ず、この告白するというを通して（そしてこのことを通してのみ）回心を契機とする彼の新しい思想の形成が可能になるような、そのような時が執筆する際に到来していたとする。

次いで著者は『告白』全体を貫く主題を『再論』の中に探求し、全13巻が如何に統一したものであるかを幾つかの説を紹介しながら明らかにしていく。

さらに『告白』の前半と後半のつなぎ目となる第10巻の冒頭の解明を通して、『告白』全体はカッシアタム対話以来の神と自己の探求という主題に導かれた統一性を持っていること、またこの営みが神の前で告白するという形式にならざるを得ないことを述べるとともに告白は単なる文学形式ではなく、愛に基づく人格的な関係を開く

共同的な営みとして捉えられることを示す。

マニ教批判は、アウグスティヌス自身それに属していたこともありその限りで特別な意味をもっており (p. 7)、その中で『告白』が極立っていること (p. 17、しかし著者は『告白』をマニ教批判書として位置づけているわけではない) は確かにその通りであると思われるが、この二重の特殊性を極立たせるためには少くともマニ教批判書についての性格づけにページを割くことが必要ではなかっただろうか。

第2章 不安と神探求

第1章第2節の最後で「まず第2序文を手掛かりにして『告白する』ことの意味を理解し、第1序文に戻って『告白』全体のテーマを明らかにしてから、彼の神探求の道程そのものを辿ってみることにする」と言われていることが、実質的には第1章第3節だけでなく、第2章の内容をも指していることからわかるように、前章と本章は密接に関連している。この章では特に『告白』全巻を貫く主題である神探求とその自己理解を、第1巻第1章の中に探求する。中でも「わたしたちの心は、あなたのうちに休らうまでは、不安だからです」という箇所注目し、ここで言われる心の不安とは単に心理的なものではなく、存在論、または創造論的な角度から捉えられるべきであって、それは安らぎがないという人間の頽落態を示すとともに、神が人間を神自身へ向かうように促す呼びかけであり告知であると見なす。人間にとって神へと向かう性質(対向性)が不安という仕方ではしか自覚できないところに人間固有の問題があるとともに、神からの呼びかけを聞く場として記憶が捉えられる。記憶論の本格的な探求は第10巻を待たねばならないが、第10巻の冒頭、記憶論を『告白』全体のひとつの軸と捉え、そこから回心を正しい神探求への方向転換 (p. 60) と見ることは全体の理解にとって重要なことである。ホルテンシウス体験もそのような枠組の中で捉えられるべきであり、哲学かキリスト教かといった二者択一的ではなく、真の知恵とは何かという一貫した探求のあらわれとして見直されるべきである。

第3章 マニ教の克服

本章では悪の問題と信仰と理性の問題が論じられる。マニ教を克服する上で果たした新プラトン主義の役割を重視するとともに、それとキリスト教との相違にも注目する。

特に後者の問題は『告白』において集中的に論じられていないが、その以前に書かれた『信の効用』等を通して、「権威が理性に先行すること」の一側面である権威に対する信仰が腐敗し病んでいる理性を浄めるという主張のもつ意味を淨き彫りにし、この点に関しては単にマニ教だけでなく、新プラトン主義を超えていく上でも重要であったことを指適しているのは注目に値する。

第4章 ミラノ体験と回心

本章ではまずミラノ体験とは如何なるものかが探求される。著者は新プラトン主義の書物との用語の比較よりも、それがどのような脈絡で語られているかというアウグスティヌスの自己理解という観点を重視し、具体的にそれに言及した箇所を分析する。そしてミラノ体験とは一度の体験の異なった表現ではなく、新プラトン主義の書物に触発されて幾度となくくり返された彼の省察の記録とする。

続く第2節（「道としてのキリスト」）では、それらの書物の中に探求を深めていった結果、次第に彼にあらわになったその欠陥部分を、主としてキリストに対する理解の深まりとの関連で考察する。しかしこれがいつごろのことかは著者も明確には決めていないようである。本章のもう一つの主題である回心については、回心当時の彼にとって何が問題であり、また執筆当時の彼が、その体験を如何なるものとして理解しているかを探ることこそ重要であるという見解の下に、『告白』第8巻を考察する中で、信じることを通してはじめて意志の分裂は統一へともたらされ、人格性は回復されたのであり、その信ずることもまた神がキリストを通じて人間に与えたというのが『告白』を執筆した時点での回心経験の理解であったと述べる。

第5章 内面の世界

本章ではいわゆる記憶の問題を論じているが、あくまでもそれは記憶の世界に自己の根源である神を探求する道程を示す限りである。

精神は他ならぬ自己自身の内面へと限りなく集中することによって自己を超えた神に出会う、つまり自己の内奥が閉じられたものではなく神に向かって開かれていることを認識するのである（p. 147）。それが「わたしを超えて、神において」の意味することと考えられる。従ってこの経験は根源的、超越的なものであり、我々の存在のはじめ、すなわち創造のはじめに関わるものであり、最終的には神に聞くこと以外に

はありえず、『告白』第11巻以降の創世記解釈へと続くことになる。

第2節（「心と内」）では、『告白』における心と、それと深い関連で用いられる内という言葉进行分析し、絶えず内に帰り、神をそこに探し求める人間の在り方が心として捉えられ、それは回心において達成されるべき類のものではなく、むしろ回心という出来事によって神へ向かうべき自己の内面性、心として生きることを決意するひとつの出発点を与えられたと考えるべきであると言われる。この章において著者はアウグスティヌスの記憶の問題をあくまでも『告白』全体の中で位置づけながら、第8巻の回心の出来事をいわば終極としてではなくひとつの新しい出発として捉え、また第11巻以降の創世記解釈を不可避的な営みと見なすことによって、『告白』全体を通して一貫して流れている主題をいよいよ浮彫りにして説得力豊かに述べていると思われる。

第6章 永遠と時間

第1節では『告白』第11巻の時間についての記述をもとに、時間を成立させる *distentio* が、我々に人格の統一を可能にさせるひろがりであると同時に、我々を多くのうちに自己喪失させる分散でもあるという、二重性をその内に含んでおり、後者を克服して前者を獲得するためには、一なる神へと超出する、あるいは集中することが必要であると説く（p. 169）。神の永遠の御言によって造られた人間は、時間的な存在でありながら、その根源を創造主のうちにもっており、神のことばに耳を傾けるべく創世記解釈がはじまるが、その聖書も神のことばでありながら人間の言葉で書かれているのでその多様性は免れない。しかし大切なのはその解釈を通してあらわれる読者の人間の在り方であり、彼らと聖書の多様な解釈を共有することこそ重要である。アウグスティヌスは、聖書解釈、しかも人間存在の根源を扱った創世記解釈を通してこのことを告白したと言えるだろう。

*

著者はアウグスティヌスのコンテキストを大切に『告白』の叙述の流れに沿って6章に分けて論じているが、各々のテーマの展開からすると『告白』の流れに沿いすぎてしまい、別の章、節だけでも可能だったのではないと思われる所もなくはない（例えば第1章→第2章第1節、第3章第1節→第4章第3節など）。また本書では、聖書解釈のもつ意味については述べているが、その具体的な解釈には報告されていない。

い。

しかし例えば、悪の問題について新プラトン主義との比較で述べるならば、第12巻の無形質料のことに触れた方がより説得力があったように思われるし、悪の問題に関連して例えば第2巻や第4巻への言及がないのも寂しい気がする。しかし我々がこの書から『告白』の大切な読み方を教えられたことは間違いない。この書は『告白』を読む上で「木を見て森を見ない」ことがないように我々の方向性と位置を確認できる羅針盤的な著作と言えるだろう。